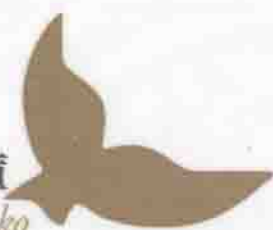


中野重治

nakano shigeharu

斎藤茂吉ノート

講談社文芸文庫
Kōdansha Bungei bunko



斎藤茂吉ノート

常盤大学図書館
nahara shigeharu
中野重治
蔵書章

講談社

文芸文庫

さいとうも きち
齋藤茂吉ノート

なかの しげはる

中野重治

二〇一二年七月一〇日第一刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2・12・21 〒112-8001

電話 編集部(03) 5395・3513

販売部(03) 5395・5817

業務部(03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

本文データ制作——講談社デジタル製作部

©Ume Enome 2012, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。



ISBN978-4-06-290166-6

目次

前書き

七

斎藤茂吉ノート

ノート一 ノートをとる資格

一二

ノート二 茂吉にたいする理解

二二

ノート三 茂吉にあるわかりにくいもの

四三

ノート四 二つの青春

七六

ノート五 抽象的思惟行為における抒情

一〇六

ノート六 女人にかかわる歌のうち

一三三

ノート七 戦争吟

一四五

ノート八 茂吉の「白秋の歌一首」

一五七

ノート九 短歌写生の説

一八三

ノート十 個の問題

二二二

ノート十一 宗教的ということ

二三二

ノート十二 ヨーロッパと耳と

二五〇

ノート十三 疑問的疑問一、二

二七〇

鑑賞と批評と——杉浦翠子の「斎藤茂吉論」および

二九八

土屋文明の「斎藤茂吉論」についての断片——

『柿本人麿』評釈篇卷之上紹介

三八

茂吉断片

三三二

はにかみの弁——加藤将之氏へ答え——

三三三

訂正その他

三五四

新版の後書き

三六四

選集版はしがき

三六五

解説

小高 賢

三六七

斎藤茂吉ノート

nakano shigeharu

中野重治

講談社



文芸文庫

目次

前書き

七

斎藤茂吉ノート

ノート一 ノートをとる資格

一二

ノート二 茂吉にたいする理解

二二

ノート三 茂吉にあるわかりにくいもの

四三

ノート四 二つの青春

七六

ノート五 抽象的思惟行為における抒情

一〇六

ノート六 女人にかかわる歌のうち

一三三

ノート七 戦争吟

一四五

ノート八 茂吉の「白秋の歌一首」

一五七

ノート九 短歌写生の説

一八三

ノート十 個の問題

二二二

ノート十一 宗教的ということ

二三二

ノート十二 ヨーロッパと耳と

二五〇

ノート十三 疑問的疑問一、二

二七〇

鑑賞と批評と——杉浦翠子の「斎藤茂吉論」および

二九八

土屋文明の「斎藤茂吉論」についての断片——

『柿本人麿』評釈篇卷之上紹介

三三八

茂吉断片

三三二

はにかみの弁——加藤将之氏へ答え——

三三三

訂正その他

三五四

新版の後書き

三六四

選集版はしがき

三六五

解説

小高 賢

三六七

前書き

このノートは、昭和十五年はじめから十六年十一月までに書いて、『日本短歌』『中央公論』『臨床文化』に発表したものにいくらか書きくわえ、それに、昭和十年以後に書いて、『短歌研究』『新潮』『日本読書新聞』に発表した断片その他を付録とし、あわせて一冊としたものである。本文についていえば、『きようこう暁紅』『しらもも白桃』雑纂篇の発行以前にとりかかり、『しらもも白桃』の発行直前に打切りとしたものである。

ノートを思い立った動機は、自分の文学観の訂正・変改ということであった。私はそれを、日本文学のうちの最も日本的なもの、いわば最も古い伝統を持つ和歌についてしたいと考え、さしあたり、素人読者として親しんできた茂吉の歌についてたどたどしく試みてみたのであった。試みが不成功に終わったのは、ひとつには素人のかなしさゆえであった。

その第一は、必要なものを読まずに不必要なものを知らずに読みあさるということであった。最後までこれはそういうことになった。第二に、古雑誌を読んだりして少しずつわかってくることがあり、わかってくるのにつれてかえって書けなくなるという事実であった。第三は、何か書けた場合にも、それが雑文としての形をとり、あとで誤りを正そうにも手のつけようがないということであった。

そのうち、「短歌の批評は、さう面倒なものではない。いよいよとなれば最上にむづかしいものであるが、はじめからさうむづかしく考へなくともよい。つまりは自分の力だけの批評しか出来ぬものだから、それにいろいろと工面して、力以上の批評がしたくなるとそこに邪念が入つて、かへつて的の外れた^{はず}わるい批評になる。私にはさういふ恥づかしい経験がいくつもあつた。」という結城哀草果の言葉を読み、「知己^{ちき}の言は即ち理會者の言である。理會者の言は常に接觸する人々によつて発せられる場合が多いといふのは、接觸することによつて眞の理會に導かれる場合が多いからである。」という茂吉自身の言葉を読み、それから、アフリカのブッシュマンのあるものには「二」までしか数の觀念がなく、それから先はすべて「たくさん」という概念で片づけているという話などを読み、こういう素人くさい目論見にもとどめを刺された思いをしたのであつたが、それでも、「運轉中運轉手に話しかけぬよう願います」という玉川電車の懸札^{かけふだ}の文句を思い出したりするとき書きついで行つた。

しかしそれも、父の死によって打ち切られる結果となった。父は十一月十九日に死に、つづいて「大東亜戦争」の勃発となった。そしてそうなってみると、自己の文学観の訂正・変改という最初の目論見の立場そのものが私のなかで改めて批判されるようになった。私はそれをいくらかでも生かそうとして試みたが、ごくごく不満足にしかできなかった。まして、もともと今では反対の考えになっている付録のなかのあるものには、今となつてはそれだけに手を入れることができなかった。ただそれが、いくらかでも本文理解の助けになろうかと思い、ひとまず付録として残すことはそのままとした。また一身上の都合から、この一、二カ月のうちに二度ばかりも東京とのあいだを往復する事情にあり、校正のことも全く行きとどかず、しやくちようくう釈 迢空の歌の解釈の誤り、「萱かや」と「菅すが」との誤りなど、一、二気づいたものもそのままにおく結果となった。ただいまとしては、自己の文学観のささやかな訂正・変改の道行き、そのさらに新しい立場にくるまでのたどたどしい移りゆきの反映としてこのノートが見てもらえれば仕合せである。素人特有の見当ちがいのなかに、やはり素人特有の怪我の功名とでもいえるものが万一にもあるとすればなおさらに仕合せである。

昭和十七年三月

高椋村一本田

斎藤茂吉ノ一ト